広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	古来「年中行事」という、子ども会活動の意味を求めて ： 自然が織りなす風土の移り変わりの中に、人間の感覚を一体化させる営み
Author(s)	上原，輝男
Citation	児童の言語生態研究 ， 18 ： 29 - 35
Issue Date	2018-10-27
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046607
Right	
Relation	

特別寄稿

古来「年中行事」という、子ども会活動の意味を求めて

―自然が織りなす風土の移り変わりの中に、人間の感覚を一体化させる営み―

元玉川大学教授　文学博士　上原輝男

はじめに

「年中行事」というものが、すべて子どもの生活にかかわるとまでいえないとしても、子どもの頃の思い出をふり返る時、その多くが、その折々の季節行事を背景として、もしくは直接的にその行事を担当したりしたことであることを考えても、私たちの人生とか社会に、この「年中行事」がどれほど深くかかわりを持ち、私たちがその影響を受けているかは、すなおに驚いた方がよいくらいである。と、そんな言い方になってしまうのも、実は、本来「年中行事」は、私たちの生活の基本的な仕組みを教え、私たちの生い立ちの思い出を織りなし、彩りを与えるために長い年月をかけて、私たちの先祖が、後の世を生きる人々のために残してくれた尊い知恵がこめられた生活理論であった、というべきなのである。

ところが、これが軽視されるのは、現代人の生活基本や生活感情に狂いが生じ、古い習慣や、かつての日本人の暮らしの風物詩のように思い始めたからだといってよい。それだけに、郷土館の中や、絵本的、幼稚園的となり、子どもの方に押しつけた感じもするが、本当は、現代人が主体的生活意識とか、私が私の人生を生きるとか言い始めた哀しい思い上がりが、「年中行事」という言葉を、昔のままながら、この世の添加物か、観光専門の絵葉書程度に扱ってしまうようになった。

日本人は、生活のことを暮らしという。その日暮らしといえばあまりいい感じではないが、夜が明け、日が暮れる。この移りを感じとっていなければ、この語が生活と同義語になるわけがなかった。日々を暮らし、折々の移り変わりに順応して行こうとする結果が、「年中行事」を生んで来たにちがいないのである。だとすると、この「年中行事」の中味にこそ、日本人の体質も、活力も、最近外国人が興味を持つ日本人の自然との一体感も、もっと卑近な趣味さえも、用意されているといっても少しも過言とならないのである。

決して、それは、日本人の特別献立ではなく、日常性が、日本の自然摂理と法則に裏打ちされて、春夏秋冬の季節に従って展開された図式と心得るべきであった。

ただこのように解説ふうに物言わねばならないことは、既に、「年中行事」は現代人の生活の基本性から外れたのだと思えば、悲しみともなるが、子どもたちにとっては、まだまだ思い出を作る重要な基本素地であると信じ、以下、主だった行事のポイントを掲げてみることにしよう。

春　正月・節分・ひな祭り

●

「はじめに」でことわったように、「年中行事」は、くらしの外にあるものではなく、く

らしのパターンとして、それがあったのである。まず「春」が「はる」であるのは、「正月」行事を行なうことによって、張る、晴（れ）る等というように、内部生命力を実感するのであった。丸いお餅を食べることによって、おなかの持ちをよくしようとしたのも、一つの証明法であったかもしれないし、白い重ね餅を鏡餅というのも、神にお供えする意味の前に、純白の玉（魂）を視覚的にも直観したのであろう。なぜ、一月を正月というのか。このことも正しく指導されたい。神が来臨している真正の月であるからである。一年の計は元旦にありとか、一年の幸福を保証してもらいに初詣すると考えるのも、まちがいとは言えないが、それは、人間御都合による神扱いとなってしまう。神が主体で、人が客体として、人が演出されているのである。故に正月であった。神が来臨している真正の月の謂である。

「もういくつ寝るとお正月」と歌ったお正月は、待たれるところが日本人的心情である。それは、時間的期待だけではない。「お正月様どこまで御座った、あの山陰まで御座った」の如くに、空間的実在感のあるお正月様という神なのである。これを折口学では「まれびと」の「常世」からの来訪という。「まれびと」が神格を付与され、より日常化されると「まろうど」となって、日本人のお客様の意識の中核を作るといわれている。

「松竹立てて門ごとに…」と文部省唱歌で歌うようになってから、全国的にこの風習は広まったといわれているが、門松と注連縄の用意は、端的に正月（様）即ち歳神を迎えるシンボルであることは誰も否定できない。注連縄は、占め縄の意味で、入来した歳神の占有場所であることを示し、不浄を禁じる印で、特に正月に掛ける注連縄を年縄という。

日本人の精神構造の基本として、迎える、送るの感覚を備えさせるのは、この正月を持つからであることを指導者は心得たい。

これが基本だという意味は、「小正月」に行なわれる全国各地に残る具体的な正月行事をみてもわかることである。たとえば、秋田の「ナマハゲ」も、「ナマハゲ」のように赤・青の鬼の面をつけないが、顔を隠して蓑笠をつけて、家々の門口で物音を立てて、唱えごとをするのは同じ「ホトホト」「コトコト」など言っている地方の例も、みなこのかたちをとっている。

「小正月」というのは、正月十五日のことで、これは元日を大正月とよんで、儀式的公式的行事とするのに対して、内輪的生活行事をしている。そのため、小正月行事は親近感のある農耕儀礼が多い。地方によっては、はっきり、子どもの行事として、正月の松飾りや注連縄を集めて積み上げ、ところによっては、「サイの神の祭り場」と称する一定の場所で、天高く燃やし上げる。つまり、これも境界まで歳神を送っているのだと考えてよい。そこが「サイ」（塞）の河原で、これが道祖神と結びついているのである。この行事を、「ドンド焼き」「サギチョウ」（左義長・三毬打などと書く）といいう。

山形県西田川郡には、「ヨノドリオイ」といって、田畑に来る鳥を追い払って、豊作を願う行事が残っている。「夜の鳥ホウエホエ、とうどの鳥といなかの鳥と渡らぬ先に、いつかにくい鳥は、しじゅうがらこがら、かしらもいで塩つけて、塩だわらさぶっこんで、おにや島さ流した」と、口々に唱えごとして鳥追う所作をするが、鳥追い小屋（東日本では鳥小屋というのが一般的）を作ったり、その中にこもって、煮炊きする風習もあったが、その小屋を燃やす折り目が十五日であった。

子どもたちは、ドンドの火に、〝書き初め〟でお習字した作品を投げ入れ、その燃え上がる高さによって、上達を占ったり、餅やだんごをあぶって食べると風邪を引かないまじないと教わるのも、この時である。

●

月がかわって、二月に入ると、もうすぐに節分で、全国的に「福は内、鬼は外」の豆まきを知らない者はいないほどに年中行事の代

表みたいである。

しかし、そのわりに、節分と鬼との結びつきは考えられていない。福の神は内に入れ、その反対に災や厄をあらわす鬼は外に追い出せという唱えごとの意味であることはいうまでもないが、もともとは、節分の文字が示すように、季節を分ける日のことで、立春の前日をいう。つまり、いよいよ寒が明けて春の立つ分岐点を感じとった年越し行事なのだから、この鬼も本来は春をもたらす歳神であったのが、陰陽道による追儺という悪鬼を追いまわす宮中儀式の影響を受けて、今日のようになった。なぜ、豆を鬼にぶつけるのかは、豆には穀霊が宿っているから、その力を借りるのである。豆まきの後、この豆を拾って、自分の年齢の数だけ食べることをするが、これも年を越したという意識のあらわれであろう。季節の行事として注意を喚起したいところである。

●

年中行事ということは、一年中にきまって行なわれる行事のいろいろということよりも、大事なことは季節の推移によって、日本人が季節感覚を呼びさまされ、習得して行くくらしのしきたりであると思わねばならない。それをこよみ（暦）と言って来たのである。季節を予知し、季節に従うくらし方ということである。今日では、昔風な風習をなつかしい思い出の真似事みたいに行なわれる傾向があるのは気がかりだが、そういう要素の最も強いのが、「ひな祭り」である。

これが年中行事の中にくみ込まれている根拠は、三月三日の雛節句の意で、五節句の一つ。ただこの日に雛人形が結びついたのは、雛人形はもともと遊戯対象玩具ではなく、神霊・形代として祈祷対象としての祭具であった。

現代でも。鳥取・厚木・和歌山の加太は、「流し雛」で有名。雛人形は流すのが本来の在りようであったかもしれない。それは、「古事記」に、流産の記事があり、これと呼応して、地方には婦人病・出産・安産の神として「淡島」様を祭っていること、および、嫁入りの時に、三月雛を持参する風習があったことなどから、初産は難産の経験済みのまじないの意味があったとする説もあるからである。また、全国ひろく、三月雛を四日すぎてもしまわないと、婚期がおくれるというのも、明らかに、この人形に、結婚を約束する呪術性を感じていることはまちがいない。いうまでもなく、三月雛の特徴、女雛男雛の配偶者飾りに、将来を祈念するところにある。

夏　端午の節句・七夕・お盆

●

ひな祭りが女の節句といわれるように、これと内容的にも、精神的にも対応するのが「端午の節句」で、男の子の節句といわれている。一般的家庭では、三月三日の床の間に飾られていたお雛様に代って、こんどは男性的に、鎧武者や甲冑、または金太郎、桃太郎等のお人形が飾られ、庭には鯉のぼりを上げる。しかし、この日が男子の節句といわれるようになるのは江戸時代で、それも武家の風習からだとされている。

それよりも長く伝えられて来たことは、四日の晩から五日にかけてを女の家、女の夜などといわれていることである。この一日だけは、女の天下とされ、この日、屋根に茸くヨモギ・菖蒲も、「ふきこもり」といって、女が家に籠もる名残りという。つまり、五月は田植えの時期で、女性はそのための潔斎をしていると説明される。地方によっては、よもぎ・菖蒲を屋根に上げるのは、この日は天から薬が降るのを避けるためともいい、また、この日、柱やすだれに、薬玉をつくって掛け、魔除けとする風習があったのも、「さ月」が、神霊を最も強く感じた季節であったことは否定できない。

端午とは、はじめての午の日のことだが、重五に強く感じるところがあったと思う。椋をつくるのは、中国からの伝来といわれており、楚の屈原が汨羅に入水したその慰霊のためというが、この日に霊的なものを重ねて感じとるからにちがいない。

しかし、以上のような端午の節句に関する故事来歴も大切だが。年中行事とは古い昔のこととだけ受けとめては、既にその行事は現代から遊離する。少なくとも現代では、五月の節句は男子、三月の節句に女子のと、子どもの生育を願う行事として不動のものとなりつつある。

男子は、床の間に甲冑を飾り、庭に幟を立てるのは、出陣の前祝いであり、子どものためには、初陣の祝宴と考えてよい。これに較べて、女子は、宮中内裏雛を飾ることの優しさ、いずれも、相応の夢を語る一日であることは、後の世まで伝えねばならない。

●

日本の夏を表現するみごとな演出といえるのが、「七夕」である。小、中学生時分に誰でも、一度は関心を向けて、どうして「七夕」と書いて「たなばた」と読むのか考えたことである。「七夕」が、星まつりと関係をもつのは、七月七日の夕と記すところからでも見当はつく。また、牽牛星（彦星）・織女星（織姫）の年一度のデートが叶いますようにと、夜空が晴れて、天の川が渡れるかどうかと星空を見上げて。祈りをこめることも知っている。また。七日の朝早く、畑へ行って里芋の葉にたまった露を集めて、その水で墨摺って、短冊に願い事を書いて、笹の葉につるす。そうすると、お習字が上手になるという。そんなことも知っているが、それがどうして「たなばた」というのか、疑問に思う子どもも多いにちがいない。

平安時代、中国伝来の「乞巧奠」という女子の手芸が上手になるのを祈る星祭りが、流行したという説が一般的だが、それ以前の日本固有の水辺で機織りして神を迎える「たなばた織り姫」の祭りが先行してあったのだと考えられている。

さらに考えを深めて行くと、七夕の習慣は、早くも「お盆のたままつり」とかかわっていることが知られる。たなばたのたなは、すでに「盆棚」のようで、飾り竹の下には竹籠を台にして棚をつくり、その上に、饅頭や、うどん・なすび・きゅうりなどをお供えするところもある。盆棚というのは、新しく死者となった新霊を迎えるために特設された空間で、精霊とこの世の人間とが交流するところである。

お盆に、ナスやキュウリで、先祖霊が乗って来る牛や馬をつくるのは、全国各地で、今も行なわれているが、茅でタナバタ馬をつくる風習は、東日本によくみられ、千葉県下では、この馬を七日の朝早く、田畑に連れて行き、家にもどると、屋根の上に上げておく。またこの日、仏壇の器物を洗いみがくことをする風習のある家も少なくないだろう。故事によれば。この日わが家では女は髪を洗わねばならないとしているところがないか。これらは、みそぎの風の名残りといわれ、東北のネブタ流しも、実は起源がみそぎ・はらいにあるからで、お盆の精霊舟や小さな燈籠流しも、納涼が目的ではなく、先祖霊の送迎であったのである。

今では、七夕の笹飾りの後始末に困っているが、四、五十年前までは、七夕の飾り竹は子どもたちに川辺までかつがれて、水に流すところまでが、七夕祭りであった。このことは改めてまた、お盆の十六日は「送り盆」といって、ナスやキュウリの牛馬をつくり、お供えものといっしょに川端に運んで、十万億土の冥途に帰る先祖を見送るイメージと重なるのが、常であったのである。

●

お盆で忘れ得ぬ風物は。「盆踊り」であろう。これは全国各地で。今も盛んに行なわれている。「盆踊り」で重要なことは、踊られるお盆の日どりが大切で、十六日に行なわれ

るものであった。つまり、盆の十六日は、奉公人の籔入りといって、住み込みで年季奉公している者が、年に二度（正月とお盆の十六日）休暇をもらって、親許に帰宅する。お寺では、「施餓鬼」といって家系が絶えて、先祖慰霊が行なわれていない、つまり、縁者を失った（無縁仏という）亡霊のために、供養を行なう。この二つの条件が重なって、お盆の最終行事となるのである。

盆踊りには、輪踊りと行列踊りと二つの夕イプがあるが、群衆する亡霊を慰める印象と、踊りに巻きこんで村外れまで送り出すイメージからだと思われる。筆者の子どもの頃。御先祖様は、無縁仏を誘って帰って来られるから、御馳走はかならず御先祖様の分以外に、その分まで作って供えるのだと母が教えたことが忘れられない。お盆の尊い教えの一つだと思う。

秋　十五夜（お月見）・祭り

●

月見が二度あるのは日本だけだといわれる。仲秋の名月（旧八月十五夜・望月という）と、旧九月十三夜の月とである。

縁側にススキの穂を飾り、豆・栗・月見だんごを供えるのは両方とも同じだが、先の名月を「芋名月」、後の名月を「後の月・豆名月・栗名月」などと呼ぶ地方は多い。ただし、ところによっては、芋名月は十三夜のことをいうのだと主張する地方もある。特に、「十三夜」を忘れないために、「片見月」（八月十五日に月見はしたからと言って、後の月を省略すること）はしてはならないという戒めがある。

日本の米文化の前に里芋の文化があったのだという学者もいる。そのせいかどうか、この名月の晩には、子どもたちが家々のお供えの芋を竿に突き刺して盗ったり。畑の芋を盗んでもよいとする風習の残るところもある。つまり、このお月見は、ただ月の美しさを愛でるだけではなく、芋・豆・栗などの初収穫の儀礼行事であったのである。鳥取県、兵庫県の一部には、この日を芋神様の祭りとよぶところもある。

●

秋祭りは子ども心にも収穫の祭りだという印象が残る。神輿・山車・行列・祭り装束、子どもの目に映る祭りの光景は、ふだんの景色とは一変していることを大切にしてやりたいものである。

全国各地方によって、またお宮、お寺の特徴によって、祭りのありようは一定でないので、一概に言えないが、子どもの心に、その特徴をわが村、わが街の祭りとして誇りに思うところが重要である。さまざまな祭りが展開されているのだが、共通するところは、老若男女、何らかのかたちで、祭りに集中している。しかも、子どもが前面に押し出され、祭りの主役をつとめるところは少なくない。

日本の祭りの根本的な特徴ともいえるところで、「稚児」が上る（祭りに参画すること。もっとはっきりするところでは、神のよりましになること）ところも多い。たった一人選ばれるところもあるが、太鼓みこしの乗り子になったり、山車の囃子方になる例もある。また行列の主役になったり、獅子舞は若い衆が殆んどだが、それにからむ獅子おどしになったりする子どももいる。結局、祭りには、子ども・若者・おとなと年齢に応じて、それぞれの技芸を要求される場面があることも忘れてはならない。そのために、祭りに先立って、その稽古が集団で行なわれる。笛・鐘・太鼓・棒・長刀等々を習う。祭りは、数少ない例を除いて、個人プレイはない。殆んどが集団で統一された団体行動である。

祭りは、全体的にみて、時間・空間の移動を演出するものといってよい。そのことを簡単に印象づけるものが、祭りの行列で、これを「お渡り」（渡御とも御神幸とも）というが、神さまが通過されるのを、人々は迎え、送るのである。この時、年寄りたちが合掌し

たり拍手して拝んでいる姿を見かけることも、まだまだなくなったわけではない。

日本の祭りは、秋祭りだけではないが、この時の推移と野山の風景が変化することをしみじみと感じさせるところに、祭りが来て祭りが去って行く、日本の祭りの基本条件をそなえているのである。それが、日本の季節の「秋」なのである。収穫・飽食、子どもたちは、祭りに食べた秋の野山のいろいろの味を覚えているだろう。しかし、秋の祭りのあとは、冬枯れの季節が足音をしのばせて近づいている。

冬　クリスマス・もちつき

●

クリスマスが、キリスト教徒にとっての最大行事であることはいうまでもないが、信者以外の日本の子どもたちにとっても、一年中で待たれる一日となっている。教会の数もふえた。年末の最大の賑わいとばかりに、商店街では人目を引く飾りつけがなされる。お歳暮の挨拶のために贈答品を互いに送る習慣はクリスマスと関係なく行なわれていたが、商業ベースにうまくのせられたのであろうか。今ではクリスマスプレゼントもお歳暮の贈答品も似たような感じになってしまっている。

クリスマスが、キリスト生誕を祝う行事であることは信者以外でもよく知っている。しかし、一般の多くは神のみ子、イエス・キリストが、救世主として十二月二十四日から二十五日にかけて、ユダヤのベツレヘムで生誕したことを、真心で喜び、敬虔な祈りを捧げるには、残念ながら立ち到っているとは思えない。だから、クリスマスを日本人の年中行事と呼ぶには抵抗がないではない。

しかし、子どもたちにとって、クリスマスイブは例のサンタクロースが、枕許に出しておく靴下の中に、プレゼントしてくれる日であることだけは、しっかりと心に記憶してしまった。子どもたちにとっては待ちに待った、最良の年中行事であるはずである。それもそのはずで、既に述べた、訪れ神により、幸をもたらされるという日本人の固有の信仰とまことに似通っている行事なのである。祈りを忘れた人間生活の存続は保証されない。子どもたちに祈りの動機を得させたいものである。宗教に国境はない。

●

ともあれ、日本人の年末は忙しい。クリスマスを終えると、ただちに新年の準備である。子どもたちにとって、お正月が来るのだという印象は、何といってもおもちつきにあるだろう。

ただし、近頃は農家でさえも、業者に頼んでしまって、家庭でもちをつくことをしなくなってしまった。幼稚園、保育園でおもちつきを行事化することは珍しくなくなったのも、幼児教育者は、子どもがもちつきを喜ぶことを知っているからであろう。本当は、各家庭で、昔同様の杵音の響くのが一番理想的であろう。これも大家族時代ならばこその行事であったのかもしれない。家族総出演でもちをつき。もちを丸めることの楽しさがあったのである。

このおもちが、神と人とを結びつける重要な役割を果たしていることは、子どもに伝えねばならない。お正月のおもちは、もともと神様へのお供えもちであることはいうまでもない。神人共食といって、日本人は神様へ御食事を差し上げたのち、お下がりを頂戴するから、食事の時に「頂きます」と言っているのである。

まとめ

辞書的に項目解説になることを避けた。それは、歳時記、年中行事が大切なのは、項目毎の知識ではなくて、年毎に繰り返されて、一年一年が経過して行き、それにつれて、自分の成長が重ねられていることに気づくことである。

最も大切なキーワードは、推移（うつり・かわり）を思うことであろう。

なぜそうなのかは、日本の風土に季節があるからで、この折り節の移り変わりに合わせることがくらし（生活）であった。その繰り返しと繰り返されることが習熟を生んで、日本人の感性なり感情は育てられて行くのである。推移・経過を注視する感覚は、空間把握よりも時間把握の方が上まさる。空よりも空いく雲に、川そのものよりも水の流れに、心奪われてしまうのがそれである。それが物のあわれとか風流心とかいわれる日本人の心情をつくるのである。

もう一つ大事なことがある。それは年中行事が、季節とちょうどいい具合に合って、一つの行事が終ると、やがて次の行事がめぐって来ている。これを周期性というが、この周期性が狂わずに、その行事をとらえている状態になる時、日本人は順調であるとか滞りなくとかいうのである。むずかしいことばになるが。年中行事に整合性とか順調を見出すことを、平和で落ち着いているというのである。

子どもたちに、年中行事を指導する目的も、せめてこの順調の感覚が宿るところまでは指導者は責任を持つべきである。

それはそんなに困難だとは思われない。すでに記述したように、年中行事の基本姿勢は、全てといってよいほどに、神仏（こういう言い方に抵抗のある人は。人に幸福をもたらす来訪者でもよい）が必ず訪れて、人々に祝福を与えて去って行く図式だといえるのだから、もしそれに異変があると、私どもの生活はたちまちにして、混乱し、不幸となるのである。私たちが日々穏やかでありたい、平和でありたいと願うのは、基本的に年中行事が順調であることが、必要条件であることをしっかり考えねばならない。

物事が順序よく運ばれて次々と片付いて行く時、人々は心にリズムを感じとることができる。これを順調とか、滞りなくとかいうのである。

子どもだから、明るく、はつらつとして活動的なのだと思ってはならない。子どもは、自然の季節のリズムを感じとっているから、そうなのだと思わねばならぬ。そうなると、季節の折り節の行事を見逃してよいわけがない。だかといって、それを教え込むことではない。「自然が織りなす風土の移り変わる状態の中に、人間の感覚を一体化させる営みを年中行事という」といってみると、これが一番正しい定義のように私には思われて来るが、如何であろうか。

上原　輝男（うえはら　てるお）
平成五年三月玉川大学教授定年退職（在職四十二年間）早稲田大学大学院在職中に逝去
國学院大学非常勤講師・儀礼文化学会常務理事・児童の言語生態研究会主宰・文学博士・西角井博士文学記念賞受賞・博報堂文部大臣奨励賞受賞
著書に、「心意伝承の研究（芸能篇）」「芸談の研究―心意伝承考―」「忘れ水物語」「歌舞伎十話」「曽我の雨　牛若の衣裳」「小学校の国語　かくあるべき」「小学校国語教材序説」「感情教育論」「続感情教育論」ほか多数